



TITLE:

巻頭言

AUTHOR(S):

藤田, 正治

CITATION:

藤田, 正治. 巻頭言. 技術室報告 2008, 9

ISSUE DATE:

2008-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233364>

RIGHT:

巻頭言

平成 19 年度技術専門委員会委員長

藤田 正治

学生のころ、毎日のように宇治川水理実験所に行き実験を行っていた。25 年も前のことであるが、私自身宇治川水理実験所で実験研究のノウハウをたくさん学んだと感じている。当時、宇治川水理実験所には工場があり、今井氏と山口氏が勤務され、我々の依頼で精密な実験装置を作っていた。すべてオーダーメイドであり、まさに使い勝手のよい優れた装置を作成していただいていた。また、我々学生も簡単な作業であれば、両氏に工作の極意を教わりながら、ボール盤による穴あけやねじきりなどをしていた。修士のときはそのお陰で実験水路を手製で作成することができた。当時は実験を行っている学生が十数名もあり、両氏は学生の引っ張りだこで、両氏のお陰で円滑な実験研究が行えたと言っても過言ではない。その後、両氏が退官され、工場も閉鎖され、それと同時に実験より数値計算を行う学生が多くなり、実験所に通うものも少なくなった。両氏の退職が研究のスタイルを変えたとも思えなくないような気がし、研究面に技官の方が密接に関わっていたと痛感する。

今年度、技術専門委員会委員長を拝命した私の任務として、9 名の退職者を迎える 2008 年度以降の技術室職員の構成、遠隔地観測所の技術職員の後継、遠隔地と宇治の技術職員や教員の交流、宇治地区での職場ローテーションなどの諸問題を解決することがあげられる。少々懸案事項も多いが、技術室が防災研究所の中で研究教育面で効果的かつ機能的に活動できるようにこれらの問題に対処してゆきたいと考えている。また、防災研究所の次の中期目標に向けて、技術室のあり方も問われるであろうし、皆様の知恵を拝借しながら、教員の知能と技術職員の技術がうまく融合しながら、お互いの能力が高められるような体制作りの構築に努力しなければならないと考えている。

さて、上記の課題の中で本年度は 9 名の技術職員の退職問題について、技術専門委員会で議論した。9 名の中には、遠隔地である桜島火山活動研究センターおよび穂高砂防観測所の技術職員の方も含まれており、遠隔地の技術者の後継問題が議論の中心であった。数年前から、遠隔地には宇治地区からローテーションで若手技術職員が 2 年程度の任期で赴任する仕組みが作られ実施されている。しかし、現場の声を聞いたところ、技術職員の技術を継承しそれを維持するためにはこの制度にはデメリットが多いという結果であった。遠隔地観測所での仕事は、流域という「面」をフィールドとして行われるので、それだけ地域と密着した部分が大きい。様々な場面で地元の方々との接触は多いわけで、いくら高価で精密な機械を使って観測したとしても、最終的には地域での人と人の付き合いが重要になることも多くある。そういう意味で、短期間で技術職員が変わることは必ずしもいいわけではなく、できれば現地勤務の技術職員の方が必要である。というものの、前述した研究室の知能と技術室の技術が融合しながらお互いの能力が高められるような体制を作るためには、遠隔地と宇治の交流にも努力しなければならない。技術職員の現地勤務と宇治地区と遠隔地の交流の活性化はセットとして考えてゆかなければならないであろう。今後、

この問題についても検討してゆきたい。

末筆となりましたが、今年是多田光宏氏が新たに採用され、技術室の一員になった。多田氏は宇治地区技術室での勤務の後、現在桜島火山活動研究センターに赴任されている。ぜひ、現地でしか学べない貴重な技術を修得され、今後活躍されることを期待している。また、今年は、昭和 42 年 4 月から長期にわたり上宝観測所の技術活動を支えてこられた和田博夫氏、昭和 41 年 4 月から宇治地区で技術室の職務を勤められた細善信氏が定年退職を迎えられる。永年のご研鑽とご貢献に対して心から感謝致しますとともに、ますますのご健勝をお祈り申し上げます。